

ロシア革命

北海道札幌北高等学校 吉嶺茂樹

はじめに

「長い19世紀」と「短い20世紀」という言葉がある。イギリスの歴史家エリック=ホブズボームが定義した言葉とされる。第一次世界大戦の過程で成立したソヴィエト連邦の成立と1991年の崩壊はそのまま20世紀の歴史の裏写しとってよい。筆者も、1917年のロシア革命から、戦間期—第二次世界大戦—冷戦—「雪どけ」—キューバ危機—ベレストロイカーソ連崩壊と言葉をつないでいけばそのまま20世紀が語れてしまうと思う。しかし、現在の「エスカリエ」を使う、とくに進学をめざさない生徒たちには、ある世代以上のこうした教員側の「思い入れ」は通じない、という現状がある。すでに20代の教員にとっても、ソ連崩壊は物心ついた頃の記憶の中の出来事である。生徒に限られた時間で何を語り、考えてもらうのか、を吟味しなければならない。生徒たちが将来TVや映画で20世紀を振り返る番組を見る際、社会主義がめざした理想と現実の乖離がなぜ起きたのか、を知らなければおそらく作り手の意図は全く伝わらないからである。ポスターや写真・映画というメディアを効果的に使ったのが社会主義政権であった。これらを追体験するような授業展開が必要ではないだろうか。

エスカリエ p.158 ~ 159 「ロシア革命」の展開の仕方としては、革命が大きく3つの段階に分かれることを年表で確認する必要があるだろう。年表<カタカナの細かい知識は省いてよい>→プチ「悲劇のロシア皇帝一家」の説明→「ロシア革命における革命と反革命の争い」の地図での確認と「シベリア出兵」→more「レーニン死後の後継者争い」でスターリン・トロツキーの対立と「消された写真」と展開し、最後にポイントチェックを

しよう。農業集団化と経済政策については、1930年代のファシズムと関連させて取り扱うことも可能であろう。

「先生、赤い旗は何で赤いのさ？」

以前何人もの生徒に受けた質問である。彼らは小学校時代、国旗覚えなどをやらされ、ソ連は「赤い旗」と覚えているが、どういう意味かは知らないようである。一番納得がいくのは「革命の過程で流された血」を意味し、ここから日本では社会主義自体を「アカ」とカタカナで表記したりする、というものである。ハンマーは工場労働者の、鎌は農業労働者のシンボルである。左上の☆は五芒星と呼ばれ、古くはオリエント時代から洋の東西を問わず使われてきた。ソ連国旗における☆は五大陸の労働者を示すものとされている。



エスカリエ p.158 ②

時代の扉②の像は、1937年のパリ万国博覧会において、ボリス=イオフアンという建築家が設計したソ連館の上に飾られた、この彫刻だけで高さ25mという巨大なモニュメントである。作者はムーヒナという女性彫刻家で、彫刻家ブルデルの下で勉強した経歴を持つ人物である。当時はこ

うした巨大なモニュメントが「社会主義リアリズム」（芸術は社会主義の称賛と国民の教化のためにあるという考え方とってよいであろう）を示す有効なプロパガンダとされた。したがってこの「農民とコルホーズの女性」と題する彫刻は、ソ連の国旗にしたがい鎌とハンマーをそれぞれ手に

持っている。

ニコライ2世と家族の肖像

中学校の教科書には「大津事件」の記載がある。しかしこの事件で重傷を負った皇太子ニコライがニコライ2世と同一人物であることがつながっていない生徒が多い。こうした中学時代の知識をたどりながらロシア革命史に近づくことも考えられる。当時の日本の新聞は復刻版が出版されているので活用できる（付言すると、新聞教材は記事の切り抜きよりも一面をそのまま印刷配付することを勧める。下段の広告などから生徒にとっても時代の雰囲気を読めることが多いからである）。大津事件の際、ニコライ皇太子は、シベリア鉄道起工式に列席する旅の途中であった。



エスカリエ p.158 ⑤ ニコライ2世とその家族 ラスプーチン

ニコライ2世はロマノフ朝最後の王で二月革命の後に退位。妻はイギリス・ヴィクトリア女王の孫であり、第一次世界大戦開戦時のイギリス国王ジョージ5世は従兄弟にあたる。家族の肖像の中の末娘がアニメ映画にも取り上げられたアナスタシアである。この家族は、最終的に2007年の発掘とDNA鑑定の結果、ボリシェヴィキ政権による全員の処刑が確認された。右上の肖像、ラスプーチンは「〇〇のラスプーチン」という表現で嫌悪される人物であるが、その実像は謎が多い。ニコライの皇太子アレクセイは血友病であった。その治療=内出血を止めるのに、ラスプーチンは「悪魔的な力」を発揮した、とされる。そのことから王族、とくに皇后アレクサンドラに重用され政界へ影響力をもった。その暗躍を排除すべく皇帝の縁戚ユスボフ公らにより殺害されたが、その死にあたっては謎が多い。300年続いたロマノフ王朝を滅亡に導いた一人ともいえよう。

シベリア出兵の「原因」とは？



エスカリエ p.159 ⑥ シベリアに出兵した日本軍

シベリア出兵は、「米騒動」の原因として中学校の教科書にも記載がある。高校世界史の中では教科書や参考書でも「チェコ・スロヴァキア軍の救援」を「口実」に出兵したとされる。しかし、なぜこれが原因となったのか、についての説明がない。ここでは簡単にその経緯についてふれておきたい。

オーストリアは多民族国家であった。国内にはハンガリー人、ポーランド人、チェコ人、スロヴァキア人などの多くの「少数民族」を抱えていた。オーストリアは、この「少数民族」の中でハンガリー人のみ特権を与え、残りの少数民族の支配をも「ハンガリー人」に行わせる、という形をとった。このためハンガリー人だけに与えられた特権的地位に対し反発を抱く民族が少なくなかった。

第一次世界大戦にあたり、オーストリアはドイツとともに同盟国としてフランス・ロシアと二方向で戦った。西部戦線と東部戦線である。この東部戦線において、オーストリア=ハンガリー帝国は「チェコ人・スロヴァキア人」からなる軍をその前線に派遣した。しかし、彼らは帝国への反発から、敵であるロシア帝国軍に「意図的に」寝返り、一部にはロシア軍に混じってオーストリアと戦う者もいたという。

その後、ロシア革命勃発の後、1918年5月、ボリシェヴィキ政権に対してチェコ軍団が叛乱を起こす。これに対しボリシェヴィキ政権が追討軍を派遣したため、日・米・英・仏の四か国が「救援」のため協定を結んでシベリアへ出兵する、という事態になるのである。1918年8月のことである。その後日本のみがシベリアへの勢力拡大を狙って

長期の出兵を続けたが、ニコライフスク（尼港；エスカリエ p.159の地図参照）事件の敗北などにより撤兵した。北海道小樽市には、この尼港事件で亡くなった殉難者の供養塔がある。小樽がシベリアへの拠点港だったためである。

最後に、シベリア出兵に関して、この地に非常に短期間存在した「極東共和国」（1920～22）にふれておきたい。この国は、シベリア出兵に対する緩衝国家として、レーニンにより設置が認められた国家である。発足したばかりのポリシェヴィキ政権は、日本のシベリア派遣軍と、ロシア帝国の白軍を追って進軍してきた赤軍とが直接対峙＝交戦することを避ける必要があった。このため双方の中間地帯に設立されたのがクラスノシチョコフを首班とする極東共和国である。この国は、日本がシベリア撤兵した結果その存在意義を失い、ソヴィエト政権に併合された。

レーニン・トロツキー・スターリン



エスカリエ p.159 more レーニン死後の後継者争い

「消されたトロツキー」の写真⑨は、アラン・ジョベール『歴史写真のトリック／政治権力と情報操作』（朝日新聞社：絶版）に詳細な説明がある。この写真は演説するレーニンと、演説の順番を待つトロツキーおよびカーメネフの写真といわれている。

レーニンは「レナ川の人」の意を持つペンネーム。トロツキーはレーニンの右腕で、赤軍を指揮して人気が高かった。レーニンの死後スターリンとの権力闘争が開始される。トロツキーは世界革命論を唱え、スターリンに敗れ国外追放処分を受け、その後世界中を転々としながらスターリンに対する批判を行い著述活動を行う。トロツキーは、最後はメキシコにわたり、スターリンの送った刺客によってピッケルで頭蓋骨を破壊されて死んだ。

スターリン（鋼鉄の意）はグルジア生まれ。民族問題の専門家として頭角を現すが、ロシア人ではなく少数民族出身の彼が、ソ連において少数民族の強制移住や大粛清を行ったことは歴史の皮肉であろう。レーニンはその死の直前、彼を「粗暴である」と評して権力から遠ざけようとしたが、レーニン自身脳溢血の発作を起こし、スターリンが後継として全権を握ることとなった。一国革命論の立場に立ち、党内のライバルを次々と粛清、独裁体制を成立させた。その体制を維持していくためにも上意下達の官僚システムが必要とされ、その硬直性故にソ連社会は停滞した。80年代、ブレジネフ政権後半期に至り、その停滞は覆いがたく、ついにゴルバチョフというリーダーを生んだ。1985年に書記長についたゴルバチョフは、ペレストロイカ（「再建」などの意）を開始するが、80年代後半の東欧民主化の動きにも適切な対応ができず、彼の進める改革に対し「ソ連国家崩壊を食い止める」、という一点のみの協力で行われた91年8月の保守派クーデタが失敗。同年12月にはソ連邦を構成していた共和国が連邦離脱を宣言しソ連は崩壊した。革命から74年後のことである。

おわりに

ロシア革命を授業で取り上げる際には、以上略述したソ連崩壊までを概略でよいので取り上げる必要がある。生徒たちが20世紀史を大きく理解するためである。筆者が生活する北海道には、北方領土からの引揚者の家族を持つ生徒がいる。隣国に対して複雑な感情を持つ者も少なくない。北海道の生徒にとり、ロシアは近くて遠い隣人である。しかし巨大な隣人をどう考えるのか、という問題は別に北海道の生徒だけの問題ではない。筆者の経験でも、ロシアを理解するうえで有効であったのは、現代社会や地理教員などとのチーム＝ティーチングであった。「労働者の政権」として発足したソヴィエト政権がなぜ官僚主義に陥り崩壊したのか、をぜひ生徒とともに考えてみたい。

*北海道大学スラブ研究センターのHPはこのテーマに関する教材の宝庫である。http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/